診療局：内科《肺腫瘍内科》

ースタッフ紹介ー

役　　職	スタッフ名
部　長	森山　あづさ
非常勤医師	倉田　宝保

ー概要ー

2007年6月1日から呼吸器科から肺腫瘍内科と診療科名を変更し、肺癌をはじめとする呼吸器（胸腔内）腫瘍疾患を専門に診療を続けてきた。

2018年度は化学療法室での外来化学療法を中心に、肺がんに加えて乳がん、胆管がん、膵がんなどの他臓器腫瘍の化学療法も外来化学療法室で施行している。

2010年4月からは近畿大学医学部から、2012年4月からは関西医大枚方病院の呼吸器腫瘍科教授・倉田宝保医師が非常勤医師として隔週木曜日午前の外来を担当している。

また、2012年4月からは呼吸器内科の外来を近畿大学医学部から久米医師、2018年4月からは大阪大学医学部から平田医師に代わり三宅医師が非常勤医師として担当し、今までの腫瘍中心の診療に加えて、肺気腫、COPD,呼吸器感染症、アレルギー疾患、間質肺炎等幅広い呼吸器内科診療が行えるようになった。

常勤医師の気管支鏡指導医を継続し、また近畿大学付属病院呼吸器科から指導頂き、呼吸器外科、呼吸器科非常勤医師とともに気管支鏡を施行。引き続き呼吸器内視鏡関連施設の維持を継続していく。

がん治療と並行して今年度から緩和チームに参加し、麻酔科、薬剤科、栄養管理科、リハビリテーション科など多職種とのカンファレンス、および回診を開始した。1999年にがん対策基本計画が策定され、2017年度の3期目の基本計画ではがん対策の方針として“予防”“医療の充実”“がんとの共生”を3本の柱として掲げている。いまや国民病となったがんについて正しい知識を持って、患者に適切な医療を受ける判断をしてもらうよう努めていく。

2018年1月からは毎週月曜日、午後から緩和外来を開始した。

2018年4月からはRST（respiratory support team）チームにも参加し、呼吸器科・三宅医師、救急認定看護師、臨床工学士、理学療法士とともに毎週水曜日、午後から回診を行っている。ICU,一般病棟での人工呼吸管理中の患者に対する、画像の読影、人工呼吸器の離脱にむけての適切な呼吸器設定や、呼吸器ケアを総合的に行う目的で検討をおこなっている。

ー来年度への抱負ー

胸部2次検診の強化、肺癌検診での地域検診受診率を高め、早期発見につとめていく。

ここ数年で進行期肺がんに対する化学療法は急速に進歩し、肺がんの重要なドライバー遺伝子であるEGFR,ALK,ROS1に加えてBRAFの解析も進み、個々の患者に効果の高い治療薬を投与するオーダーメード治療が求められている。2013年には日本でも肺がん遺伝子スクリーニングプロジェクト(LC-SCRUM-Japan)が開始され、遺伝子パネルを用いた次世代シークエンサーにて、迅速に大量の遺伝子解析を行うことが可能となった。同じ臓器のがん腫でも遺伝子変異は多様性を示すことが明らかになり、がん治療は臓器を超えて、遺伝子変異に応じた治療へと変化しつつある。MSI-Highによるペンブロリズマブ承認適用も大きく注目された。

また上記遺伝子異常に対する分子標的薬に加え、免疫調整薬と従来からある細胞障害性抗がん剤との併用の臨床試験結果も出ており、肺がんの化学療法は複雑化を極めている。検査科および化学療法室での新しい検査手段や結果を理解し、地域差のない医療を提供できるよう臨床へと結び付けていくことが重要である。

積極的ながん治療とともに、がん進行期および化学療法中の症状緩和中心とした緩和診療にも重点を置き、がん拠点病院として、緩和ケアセンターを成立させるべく、緩和ケアチーム、緩和ケア外来、そして将来的緩和ケア病棟を設立することを目標とする。それには地域連携することが重要課題である。

2019年5月26日の緩和研修会開催予定。

肺癌および胸部異常陰影新患者数＝32人

緩和外来新規患者数＝7名

＜施設認定、関連施設＞

日本呼吸器関連施設

日本呼吸器内視鏡関連施設（気管支鏡）

Eブロック化学療法室にて